

## 十九 台 覧

大正十三年、私が二十九歳のときです。皇后陛下が京都にお出でになったのです。その当時、私は京都の成安女子学院で速記を教えていたのです。その学校は現在、成安女子短期大学、成安女子高等学校となつていますが、私と同じ長崎県出身の瀬尾千賀子という人が創立していたため、兄と二人で応援していたのです。そのためその学校の国語の時間を一時間とつて速記を一年生に教えていたのです。たまたま皇后陛下が京都にお出でになるといふので速記教育を皇后陛下の台覧に供したいと思つたのです。

早速府庁に行つて秘書課長さんに会い、そのことを話したのです。ところが秘書課長さんがそれは自分の方ではできない、宮内省のご意向によるといふのです。それでその当時京都に来ておられ、両洋中学の顧問をしていた、陸軍大佐だった角 徳一先生にお会いしてその話をしますと、その当時の侍従武官長奈良武次大将閣下にご紹介していただいたのです。私は早速東京に行き、奈良大将をお訪ねしたのでした。夜でした。ベルを鳴らすと奈良大将が入口の小窓の障子を明けられたので、角大佐からいただいたご紹介の名刺を差し出したのです。そうすると、奈良大将は「ただ一枚の名刺だけでこんな真夜中に」といつてお会いしていただけないようなふうでした。真夜中といつても何時ごろだったでしょうか、あるいは九時も十時も過ぎていたかも知れないのですが、それを「真夜中」といわれたのは、奈良大将は